

12 かき

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	25	

(1) 特徴及び吸肥特性

土性に対する適応範囲はかなり広いが、一般に、やや重い粘質がかつた壤土で生育がよく、養水分の保持力の弱い砂質土壌では生育が劣る。根の耐水性はかなり強いので、停滞水がないかぎり、土壌水分の多い所でも生育は良好である。反面、**耐干性が劣り**、果実肥大に対する土壌水分の影響が極めて大きい。土壌反応については、**pH (H₂O) 6.0~6.8の微酸性**の土壌において生育がすぐれ、酸性土壌では根群の伸長が著しく劣り、アルカリ性土壌では、地上部の生育が抑制される。

かきは**根群分布が深いこと、隔年結果性**があつて、生育状態もそれによって変わるなどから、施肥に対しては、あまり敏感に反応する果樹ではない。

窒素施肥量を考える基礎として、1年間に吸収される**窒素量が10a当たり窒素8.6~9.9kg**との試験例がある。この吸収量から試算した**窒素施肥量は、10a当たり19.8kg (10a当たり収量2t)**となった。ただし、施肥量は、土壌条件によって異なるので、樹の観察、結果や品質、土壌の状態など総合的な判断によって適正施用量を年々修正していくことが必要である。